

尾張藩初期の御深井御薬園について

水野瑞夫^{a)}・遠藤正治^{b)}・小池富雄^{c)}

要旨：尾張藩の各種薬園図の総合的調査によって、これまで混乱がみられた御深井御薬園の成立と変遷過程の若干が明らかになった。従来、最古のもと信じられてきた「元御薬園御絵図」（元禄6年）より「尾張藩御深井御薬園絵図」（「御薬園之図」）の方が古い薬園図であることが判明した。このことから、御深井御薬園は幕府薬園から下付された39種をはじめ約115種の薬草を栽培して承応元（1652）年頃に開設されたものと推定できた。「御薬園之図」の薬種名と図に基づいて植物の比定を試みて、人参・細辛など薬種のいくつかが今日のと異っており、漢名や漢字名に混乱がみられることが明らかとなった。この図は実際の植物のかなり正確な写生図とみられ、江戸期の薬園創生期の薬種の生々しい姿を写す貴重な絵図と評価できる。

これらの薬草は御深井での栽培になじまず、やがて果樹園の性格の薬園に改造され、新御薬園および一時西ノ新御薬園に拡張され、御下屋敷御薬園の成立後もなおしばらく存続した。これまで最初の薬園とみられてきた巾下御薬園は実は西ノ新御薬園とほぼ特定できた。さらに、御深井御薬園の現在地の推定と薬園奉行の系譜の解明も試みた。

索引用語：古薬園図、江戸の薬園

A Study of the Honorable Herb Garden “OFUKE OYAKUEN”

in the Early Days of the Owari Clan

MIZUO MIZUNO^{a)}, SHOJI ENDO^{b)} and TOMIO KOIKE^{c)}

The establishment and development of Ofuke Oyakuen(Ofuke Herbal Garden)were clearly determined based on a survey of various illustrations of herbal gardens preserved by the Owari clan. ‘Owari Han Ofuke Oyakuen Ezu’ (abbr.Oyakuen No Zu)(Illustration of Ofuke Herbal Garden of Owari Clan)is older than ‘Moto Oyakuen On Ezu’ (Original Illustration of Herbal Gargden)of 1693,believed to be the oldest.Ofuke Oyakuen would thus appear to have been established in 1652,with 115 species of herbs including 39 provided by Bakuherb Yakuen(Governmental Herbal Garden).

In a study of herbal names and illustrations for ‘Oyakuen No Zu’ ,Ginseng Radix and Asiasari Radix were names found not to be in use at present and some names to differ from the Chinese names.This illustration is regarded a considerably accurate sketch of real herbs and thus should be regarded and valued as one presenting vivid pictures of herbs in the early days of Edo herbal gardens.

a) 岐阜薬科大学、岐阜市三田洞東5丁目6-1

a) Gifu Pharmaceutical University,
6-1, Mitahora-higasi 5 chome, Gifu 502, Japan

b) 岐阜県立華陽高等学校、岐阜市大縄場3丁目1

b) Kayo High School
3-1, Ohnawaba, Gifu 500, Japan

c) 徳川美術館、名古屋市東区徳川町1017

c) the Tokugawa Art Museum, Nagoya
1017, Tokugawa-cho, Higasi-ku, Nagoya 461, Japan

In Ofuke Oyakuen, these herbs were not successfully grown. It was renovated into an orchard like a garden then expanded into Shin Oyakuen (New Herbal Garden) and then Nishi No Shin Oyakuen (West New Herbal Garden). It thus continued to exist for a while following the establishment of Oshitayashiki Oyakuen (Oshitayashiki Herbal Garden). Habashita Oyakuen (Habashita Herbal Garden), possibly the eldest, was identical with Nishi No Shin Oyakuen. Attempt was also made to determine the original site of Ofuke Oyakuen and established the genealogy of Yakuen Bugyo.

Key phrases ; ancient herbal garden map, Edo herbal garden

1. 尾張藩薬園の成立についての研究史

尾張藩の薬園に関する先駆的研究としては上田三平の『日本薬園史の研究』¹⁾が知られる。上田は、城北に薬園が経営されたのは元禄以前と推定し、それを示す元禄6(1693)年5月の「元御薬園御絵図」を挙げ、この薬園を改造して西方に拡張したのが新薬園(御深井御薬園)であるとみなし、その絵図として「尾張藩御深井御薬園絵図」を紹介し、またのち、この北方に鳥部屋薬園を加えたとした。

つづいて右左見²⁾は、最初の薬園は巾下御薬園であるとして、巾下御薬園は正徳5(1715)年新地屋敷となりのち御下屋敷に移され、のち別に御深井の花壇・果樹園を改造・拡張したものが御深井御薬園であるとした。以後、吉川³⁾、深谷⁴⁾、水野⁵⁾、水野・遠藤⁶⁾らによって考察されるが、いずれも「尾張藩御深井御薬園絵図」が「元御薬園御絵図」の拡張された姿であるとする上田・右左見の解釈が踏襲され、これがほぼ通説となっている。

しかしこの通説に従うと、御深井御薬園の地形は諸種の城下図の地形と整合せず、現在地の比定が難しく、これまでその所在地は比定されていない。

小池⁷⁾は新たに「下御深井絵図」⁸⁾に注目し、本御薬園と新御薬園が併設されていたことを指摘し、さらに、「新御薬園指図」⁹⁾によって西ノ新御薬園の存在に言及した。

2. 御深井御薬園の成立

名古屋城本丸の北側、現在の名城公園一帯は尾張藩によって御深井あるいは下御深井と呼ばれる庭園として営まれた。初期の薬園はこの一角を中心に営まれたので、御深井御薬園と総称することにする。御深井とは湿地・沼沢地の意である。御深井御薬園のうち最初に開設された部分が本御薬園で元御薬園とも呼ばれ、のちこれに新御薬園が加えられたのであるが、まず、この本御薬園の成立時期を探ることにする。

尾張徳川家は徳川御三家の筆頭であったので、少なくとも表向きは幕府の政策に忠実であらねばならなかった。薬園の成立においても常に幕府の強い影響がみられる。寛永15(1638)年、麻布御薬園と大塚御薬園が幕府の江戸における最初の薬園として開設されるが、両薬園の成立に際しては、木曾薬種が堀取られたと伝えられ¹⁰⁾、開設後しばらくすると、年々両園でとれた薬種が尾張藩をはじめ御三家に下附される¹¹⁾。『徳川実紀』¹²⁾には、寛永17(1640)年12月将軍家光が尾張藩初代藩主義直および水戸藩主に「薬園の薬材五十五種づつ」下附したとあるのをはじめ、寛永20(1643)年、正保2(1645)年、同3年、慶安元(1648)年、同2年にもそれぞれ同様に薬種を下附したことが記録されている。将軍家綱の代になってもこれが続き、二代藩主光友の時代の尾張藩の日記¹³⁾によれば、承応元(1652)年12月2日幕府御薬園の御薬種39味が下附され、ついで薬草栽培の記事があるという。この薬種39種が栽培されたとすれば、これはこの頃尾張藩で薬園が開設された一証左とみなせる。

二代藩主光友は家康の孫にあたり、寛永16年その正室として将軍家光の長女千代姫(霊仙院)を迎えていた。寛

文9 (1669) 年江戸に庭園史上有名な「戸山荘」を造営したのはこの千代姫をなくさめるためであったとされる¹⁴⁾。幕府との関係はこの時期とくに緊密であり、幕府に倣って薬園を開設する環境は充分整っていたのである。

次に、上田によって紹介された「尾張藩御深井御薬園絵図」が、通説と違って、この開設間もない頃の薬園を描いていることを示そう。まず、「尾張藩御深井御薬園絵図」は模写図であるので、その原図「御薬園之図」(徳川美術館所蔵、Fig.1)¹⁵⁾によって原図の製作時期を推定すると、書風や料紙・彩色などから17世紀後半頃と推定できる。

「御薬園之図」によれば、この薬園の全形は、北に開いた逆台形をなし、四方を堀で囲っている。北は東西87間、南は東西68間半、東は南北42間、西は南北43間で、坪数は約3350坪である。薬園内部は大きく3区域に分けられ、中央よりやや西側に藩主の休憩所である御薬苑堂とスハマ(スハマ、洲浜)があり、これに接して薬草が栽培される花壇群(a域)が整然と配置され、西側は薬園奉行と推定される長七郎家と菜園(c域)、そして中央より東半分は広い農園(b域)からなる。ここでa域の6つの薬草花壇(a₂~a₇)は東側を杉並木で囲って管理に格別な配慮がなされたことを窺わせるが、ここに栽培された薬草は39種を数え、まさしく前述の拝領薬種数と一致する。

スハマに橋が懸けられてあり、これには「向嶋ニ在シ板一枚橋唯今は懸ル」と書込まれてある。「向嶋」とは御深井内にあった松山の御茶屋の別名であり、松山の御茶屋は万治元(1658)年に廃止されている¹⁶⁾。この廃材が利用されたとすれば、この廃止の際であろう。「御薬園之図」は、花期や成長の異なる薬草が一斉に開花した姿が描かれているので、開設からかなり年月が経っているはずである。もし万治元年とすれば開設より6年後となり、この薬草の描かれ方をも説明できる。

3. 本御薬園の薬草

「御薬園之図」に描かれる植物は約115種を数える。うち、a₂~a₇域の幕府から下附されたものと推定される39種の薬草は、

荊芥・薩摩防風・三七・白斂・木香・商陸・コエンドロ・升麻・知母・地黄・大黃・イノンド・瞿麦・香柏子・白朮・竜腦薄荷・冬葵子・鬱金・茴香子・和川芎・馬鞭草・胡黄連・続随子・天門冬・澤蘭・百合草・紫苑・香附子・人參・ハツクリ・薄荷・タカトウ草・良薑・フナバラ・細辛・附子・河原柴胡・益母草・唐川芎

である。ここで、荊芥・地黄・瞿麦・和川芎・澤蘭・香附子・益母草・唐川芎の8種は婦人薬であり、婦人薬の重視が窺われる。コエンドロとイノンドとは、のちに胡荽および蒔蘿と漢名があてられ、幕府薬園で栽培されて幕府医官に下附された記録¹⁷⁾があるが、ここではポルトガル語およびスペイン語からの名がそのまま、用いられている点が注目される。舶来間もない珍しいハーブとして栽培されたものであろうか。大黃は中国産であろうか、北方高地の品種であるから名古屋周辺での栽培は無理である。わずかに約330坪程の花壇の割合には多種の薬草が栽培されており、見本薬園区としての性格が強い。なお、スハマの南のa₁域には、イノシリ草・釣鐘人參・薬師草・薏苡仁・羌活・牛膝・扁蓄・半夏・小茄子・ナモミ・白鷄頭などの薬草が植えられ、a₈にはカキトラシ・威靈仙・リンダウ・五味子・青木香・スミレ・藜蘆などが見える。スハマの北に菊花の花壇a₉があるが、この菊花は小花であり、観賞用ではなく薬用の菊花と思われる。

b域の植物は、牽牛子・紫蘇・芥子・粟・大豆・瓜・稗・黒藪豆・白藪豆・木綿・小豆・唐黍・蕎麦・蓖麻子・胡麻などであり、穀類が多く、薬用よりは食用の農作物が目立つ。

c域には、香薷・芋・茅根・ニラ・山梔子・小南豆・大根・茄子・桑之木・菜・夕顔など、菜類が植えられて

ある。

このほか、周辺のd域には、カニクサ・エモギ(ヨモギ)・茶ノ木・木瓜・ケタテ・枸杞・苦参・マンジュサゲ・白及・ブドウ・桔梗・石見川・木通・仙人掌・忍冬・常山・葛根・天瓜・五加皮・青木などが植えられ、さらに南堀には蒲黄・澤瀉・ヲモタカ・真菰・菖蒲・川骨・石菖・三稜など沼性の植物が栽培され、薬用とともに、観賞用ともなっている。

「御薬園之図」に記載された薬種名と図に基づいて植物の比定を試みた結果をTab.1 にまとめておく。特徴的な例を挙げると次のようになろう。

2 釣鐘人参は、ツリガネニンジン *Adenophora triphyllum* A.DC.var.*japonica* Haraとみられるが、図は4枚輪生しているので、*A.tetraphylla* Fisch.とも思える。ツリガネニンジンとは3~5枚輪生の植物である。

4 薏苡仁は、ハトムギ *Coix lachryma-jobi* L.var.*ma-yuen* Stapf.が間違いなく描かれてあると思われる。

5 羌活は、ウド *Aralia cordata* Thunb.と思われる。

14 三七は、サンシチソウ *Gynura japonica* Juelとみてよい。

22 大黄は、中国産の *Rheum palmatum* L.である。

25 香柏子なる薬種は見当たらないが、図から杭柏止 *Angelica dahurica* Benth.に比定できる。

27 龍腦薄荷は、通常のハッカ *Mentha arvensis* L.var.*piperascens* Malinv.であり、42 薄荷がオランダハッカ *Mentha spicata* L.であろう。龍腦薄荷は、享保七(1722)年の和薬改会所の検査基準書『和薬種六ヶ条』に見え、「向後名を改可致和薬」に含められ、薄荷の名に統一されたことがわかる。

40 人参は2種描かれてあり、一は朝鮮人参と他はムカゴニンジンとの指摘もあるが¹⁸⁾、図2種とも図の形態からみて *Panax* sp.ではない。朝鮮人参のわが国での栽培がまだ成功していない時代であり、人参についての理解はかなり混乱していたのであろう。

43 タカトウ草は、タカトウダイではなく、信州高遠藩で栽培されたアキカラマツ *Thalictrum thunbergii* DC.であろう。

46 細辛は、図に茎があるので、*Asiasarum* sp.ではないことがわかる。

図が正しいとすれば、今日通行する薬種と同様のものがかなりある反面、人参・細辛のように名称が同じでも全く異なった植物が宛てられている例が多い。この時期の漢名や漢字名の混乱した状況の反映と云えよう。こうした混乱の中にあっても、本格的な薬草栽培がめざされていたことがよくわかる。なおこの図には、杉以外にさしたる薬木・果樹類は見あたらない。まだ果樹園的な構想は無かったのであろう。

4. 御深井御薬園の拡張

貞享元(1684)年の「下御深井絵図」(Fig.2)によれば、本御薬園の西隣に南北二区画の新御薬園が描かれてあり、光友の時代にすでに、本御薬園の改造と新御薬園の増設が試みられていたことがわかる。

この図では、本御薬園の部分に、「御薬園之図」に描かれていた薬園奉行役宅と御薬園堂とは無く、これらの建物が新御薬園の敷地に移されている。これとほぼ同様の地形が「御鳥部屋御薬園御樹木畑絵図」¹⁹⁾に描かれてある。これには地形の寸法が記載されてあるので、これによって本・新御薬園の規模をみると次のようになる。

本御薬園		北64間、南53間、東44間、西43間2尺、	約2,600坪
新御薬園	(北園)	北77間、南73間半、東43間2尺、西52間半、	約3,500坪
新御薬園	しやくやく畑(南園)	北50間半、南47間半、東44間半、西42間、	約2,000坪

本御薬園の部分についてだけみると、「御薬園之図」に描かれた薬園の東部が削り取られ、約750坪ほど縮小されているが、新御薬園と合せた総坪数は8,100坪で全体の規模が2倍半となっており、決して縮小ではない。

a) **本御薬園の変遷** 「御薬園之図」にみられる薬草は、名古屋の地の栽培には容易になじまないものが多く、当時の技術では早晚、薬園の荒廃を免れず、改造を迫られたものと推察される。この過程をいくつかの絵図によってたどることができる。

まず、「御花畑御薬園之図」(Fig.3)²⁰⁾は、薬園奉行役宅は無くなっているものの御薬園堂は残っており、「御薬園之図」と「下御深井絵図」との中間の時期のもと推定される。a域は菊花畑と草花畑、b域は葡萄畑、c域は茶畑などであり、栽培がまだ手始めだったことを示している。

次に、「御薬園御絵図」(Fig.4)²¹⁾は、薬園奉行役宅・御薬園堂がともに無く、「下御深井絵図」とほぼ同時期、つまり貞享元年頃と推定される。a域はぶどう棚・花壇・くるみ・つつじ・けんほ梨子・楊梅、b域はぶどう棚・御茶園・花壇・本いちご・寒菊・ほうろくいちご・柿、c域は御茶園・大杉などとなり、樹木・果樹の植込みが進んでいる。

この後の段階が、上田によって最古のものとして挙げられた元禄6年5月の「元御薬園御絵図」とみられる。薬園奉行役宅・御薬園堂がともに無くなっているのはもちろん、薬園奉行役宅跡地の利用が進行していることがわかる。上田の「元御薬園御絵図」は模写図であり、原図(Fig.5)²²⁾と比較するとかなり誤写が散見されるので、原図を基にするとa域はつげ・びやくしん・むく・梅・そくむよう・松・樅・桜・くるみ・芍薬・水瓜・覆盆子・あんめんたう・紫蘭・花しょうぶ・しろ桃・しの竹・けんほの梨子・つつじ・松・梅楊・紅葉・かん竹、b域は覆盆子・御茶園・柿・けいとう・いちご・ほうろく覆盆子・山梨子、c域はほうろく覆盆子・しゃくなん木・柿・御茶園・椿・梅・松、d域は梅・桃・さいかち・椿・桜・柏・栗・紅葉・柿・榎などであり、その種類は約36種を数えるのみである。薬草の数はわずかであり、樹木・果樹が多い。実用的な果樹園的薬園への転換が進んだことがわかる。

「元御薬園御絵図」には、栽培薬草木の高さと廻りが付札で示されている。つげ高2間半廻2尺半、びやくしん高2間半廻1尺、むく高5間余廻1尺5寸、梅高1間余3本立、そくむくよう高3間余廻1尺、松高4間半廻1尺余、樅高5間余廻2尺、桜高2間半2本立、くるみ6間余廻1尺9寸余、杉高7間廻3尺など、樹木が大きく成長していることが知れる。この廻3尺の杉の樹齢は約40数年と推定できる²³⁾。40数年前に遡れば、まさに開設期と推定される承応元年頃となるのである。

b) **新御薬園の薬草** 「御薬園御絵図」によれば、新薬園は堀(江川)を隔てて北園(d域)と南園(e域)との2区画に分けられている。北園には、花壇・ぶどう棚・御茶園・榎・つつじ・杉・梅・諸木植込などがあり、南園には、ぶどう棚・御茶園・芍薬畑・牡丹・梅並木・野老畑・小松・めうか畑・ぐみ植込・ふやう・花壇などがある。南園は「下御井絵図」に「しゃくやく畑」と名付けられているように、芍薬の栽培を中心として構想されたものと推定される。芍薬や牡丹は江戸初期には薬用として用いられていたもので、必ずしも観賞用とは云えない。いずれにしても、本御薬園と同様、実用的な果樹園的薬園に転換がはかられていることを示している。

c) **西ノ新御薬園** 「御薬園御樹木畑御厩畑絵図」(Fig.6)²⁴⁾および「新御薬園指図」(Fig.7)²⁵⁾によって、新御薬園南園の西側には、一時期さらに西ノ新御薬園の増設が企てられたことがわかる。両図からその規模をみると、

西ノ新御薬園 北約114間、南約114間、東約69間半、西69間半、約7,900坪

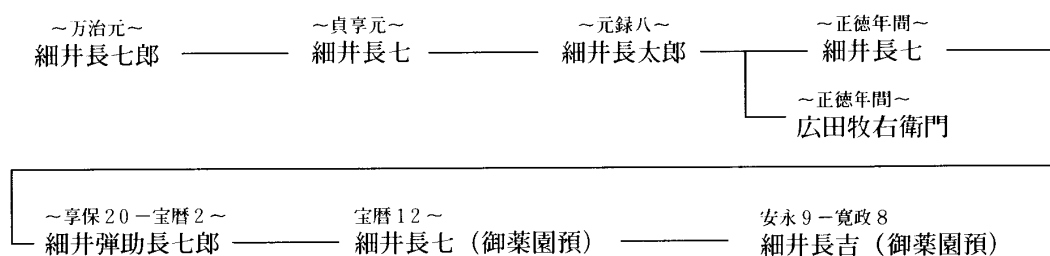
という大規模なものであり、薬園奉行の御用場・中間部屋・蓮池なども造られてあった。「新御薬園指図」は、ぶどう・御茶などのほかは「此所けし御花壇ニ仕候」「此所御預ヶ之御たはこ畑」などとあるのみで栽培植物の記載

は少なく、設計段階の図である。

両図に記載される寸法から、西ノ新御薬園のみならず本・新御薬園、つまり御深井御薬園全体の現在地を比定できる。各種の絵図の間で地形がかなり変形があるので正確なところは求め難いが、推定現在地はほぼ Fig.8 のようになろう。本御薬園は北区名城 1 丁目の名城公園内、新御薬園は名城公園内・西区堀端町および数寄屋町の一部、西ノ新御薬園は堀端町と数寄屋町の一部の辺りである (Fig.9)。

5. 薬園奉行の系譜と御深井御薬園のその後

尾張藩の『藩士名寄』や『御小納戸日記』などによって、不十分ながら、御深井御薬園の薬園奉行の系譜を次のようにたどることができる。



ほぼ細井家の代々に受け継がれている。通説によれば、元禄の頃薬園奉行を置き広田牧左衛門の名が見えるとされるが²⁶⁾、元禄 8 (1695) 年頃の『元禄八亥頃分限帳』²⁷⁾には「御薬園奉行、十石、細井長太郎」とあり、細井長太郎のみである。広田牧右衛門の名が見えるのは『正徳年中分限帳』においてであり、「御薬園奉行、拾式石式人分、細井長七、同、広田牧右衛門」とある。牧左衛門ではなくて牧右衛門とあり、薬園奉行が二人制となっている。このような二人制は幕府御薬園では通例であったが、尾張藩での二人制は例外的である。のち御下屋敷御薬園が軌道に乗った宝暦期において、御下屋敷御薬園に薬園奉行が置かれたときには、それに伴い御深井御薬園の薬園奉行を御薬園預に格下げしているのである²⁸⁾。

西ノ新御薬園を描いた「御薬園地割御絵図」²⁹⁾には「本メ御薬園奉行広田牧左衛門」との貼紙があるので、この二人制は西ノ新御薬園の増設に際してとられたことが知れる。このことから西ノ新御薬園の増設時期を正徳年間頃と推定できる。この事業が4代藩主吉通によって企てられたものとすれば、吉通は正徳 3 (1713) 年急逝しているため、この藩主の急逝が廃止の一因であったとも推察される。

西ノ新御薬園は短命に終るが、本・新御薬園はさらに存続する。「宝暦年間名古屋城下図」³⁰⁾や「天明以前名古屋図」³¹⁾などによって、絵図の上では宝暦期まではその存在が確認できる。文献の上では、安永 9 (1780) 年園右衛門倅細井長吉が御薬園預となり、この長吉は寛政 8 (1796) 年御庭預に転じたという記録³²⁾がある。

天明 5 (1785) 年大幸川 (堀川) の大改修があり、これにともない、堀川が新御薬園地を縦断したため、新薬園の部分は取り潰されたものと思われる。この後の姿は「茅庵御門外御薬園曲輪之図」³³⁾に見える。この図には本御薬園の部分は南北に長く拡張されて描かれているが、薬園ではなく「畑」と記されており、廃園となったものであろうか。『金城温古録』³⁴⁾には御深井御薬園についてほとんど言及がない。幕末においてはその旧跡すら忘却されている。

5. 討論と結論

通説で最初の薬園とされる巾下御薬園について検討しておこう。巾下御薬園についての典拠は、『鸚鵡籠中記』

³⁵⁾である。同書の正徳5（1715）年9月17日の項に「今日巾下御薬苑ノ跡新地やしきニ被下」とあることに拠ったものとみられる。巾下は名古屋城西側の名古屋村方面の通称であるが、西ノ新御薬園のあった西御深井も「巾下御屋敷」³⁶⁾とか「巾下御茶道丁」³⁷⁾と呼ばれた例がある。従って、『鸚鵡籠中記』の云う「巾下御薬苑」とは西ノ新御薬園をさすものとみてよい。新屋敷地として藩士16人へ分配された総坪数は4850坪になるが、この坪数は最盛時の西ノ新御薬園の坪数の一部とみられる。御薬園奉行広田牧左衛門の名がこの後全く見えない点も、西ノ新御薬園が正徳5年頃には廃園となっていたことと符合する。

なお、このような御深井御薬園とは別に、名古屋城下近在には藩士の拝借地に小規模な薬園が経営されていたことが明らかにされている。寛文9年馬医の佐藤甚兵衛と佐藤内左衛門に名古屋村新田と下原前津の薬園畑がそれぞれ300坪、加藤久兵衛と高津徳平に日置村御薬園畑がそれぞれ300坪、また寛文12年に小池理左衛門に新田年貢地1反が薬園畑として渡ったなどの例である³⁸⁾。

鳥部屋薬園を加えたとする通説は、「御鳥部屋御薬園御樹木畑絵図」を典拠としたものと思われる。同図および「下御深井絵図」の記載をよく見れば、御鳥部屋が薬園ではなく、新薬園の北に隣接する屋敷名に過ぎないことが瞭然である。「御鳥部屋御薬園・・・」という標題から生まれた誤解であり、鳥部屋薬園はもともと存在しなかったのである。

尾張藩の薬園の初期のものとして、御深井御薬園が幕府の影響を強く受けながら開設された。その時期は承応元年頃と推定できた。この薬園はのち本御薬園と呼ばれた。開設に際して幕府から下附された39種をはじめ約115種の薬草が「御薬園之図」に描かれていることを見た。これに記載された薬種名と図に基づいて植物の比定を試みると、この時期の漢名や漢字名のかなり混乱した状況が浮き上がってくる。薬種の名称の混乱は享保期になって正されることになる。この図は、古い中国の本草書にみられるような概念図ではなく、実際の植物のかなり正確な写生図とみられる。江戸期の薬園創生期の薬種の生々しい姿を示す貴重な絵図と評価できる。

本御薬園は、はじめ見本的薬園として構想されたが、これらの薬草は御深井での栽培になじまず、薬園の改造が試みられ、果樹園的薬園へと変り、さらに新御薬園および一時西之新御薬園を加えて実用的薬園へと拡張された。御深井御薬園は、御下屋敷御薬園の成立によってすぐ廃止されたのではなく、その後もかなりの期間併存している。

これまで不明であった御深井御薬園の所在が比定できた。また、薬園奉行として細井家の系譜の一端も明らかとなり、薬園預としての細井家の最後は寛政8年であった。御下屋敷御薬園については稿を改めて考察したい。

謝辞

本研究は尾張本草学研究会のご援助に多くを負っている。調査と執筆に際して、青木忠夫・安達幸夫・岩崎鐵志・岩下哲典・河村典久・幸田正孝・宗田 一・野呂征男・原田 守・村松俊雄・山内一信・山本祐子の名氏から数々のご教示とご援助を賜った。資料の利用について徳川林政史研究所・徳川美術館・名古屋市蓬左文庫・名古屋市鶴舞中央図書館・名古屋市博物館・愛知県図書館など関係機関にお世話になった。皆様に謹んで御礼申し上げる。

引用文献と注

- 1) a) 上田三平、日本薬園史の研究、139、(1930) ; b) 同・三浦三郎編、改訂増補日本薬園史の研究、130、(1972)

- 2) 右左見直八、菅草、8、65、(1932)
- 3) 吉川芳秋、郷土文化、15 (1)、10、(1960) ; 同、医学・洋学・本草学者の研究、八坂書房、43、(1993)
- 4) 深谷義明、愛知県薬業史、86、(1966)
- 5) 水野瑞夫、改訂増補日本薬園史の研究、264
- 6) 水野瑞夫・遠藤正治、日本の生物、2 (5)、17、(1988)
- 7) 小池富雄、慈斎研究会だより、58、1、(1992)
- 8) 下御深井絵図、(1684)、名古屋市蓬左文庫所蔵
- 9) 新御薬園指図、名古屋市蓬左文庫所蔵、紙袋に「西ノ新御薬園指図」とある
- 10) 家高荒治郎、信濃、3 (6)、14、(1934)
- 11) 宗田 一、東アジアの本草と博物学の世界、上、思文閣出版、117、(1995)
- 12) 徳川實紀3、新訂増補國史体系、吉川弘文館、213、337、399、425、466、570、629、(1990)
- 13) 尾張藩の日記の原本は不明、ここでは前注1) に拠る。
- 14) 小寺武久、尾張藩江戸下屋敷の謎、中公新書、15、(1989)
- 15) 御薬園之図、一舗、238×146cm、徳川美術館所蔵
- 16) 奥村得義、金城温古録、(4)、名古屋叢書続編、32、(1967)
- 17) 前注11)、121
- 18) 前注2)、67
- 19) 御島部屋御薬園御樹木畑絵図、1舗、名古屋市蓬左文庫所蔵
- 20) 御花畑御薬園之図、1舗、115.8×156.8cm、名古屋市蓬左文庫所蔵
- 21) 御薬園御絵図、1舗、182.5×122cm、名古屋市蓬左文庫所蔵
- 22) 元御薬園御絵図、1舗、176×136、(1693)、名古屋市蓬左文庫所蔵
- 23) 上原敬二、樹木大図説、1、343、(1959)
- 24) 御薬園御樹木畑御厩畑絵図、1舗、名古屋市蓬左文庫所蔵
- 25) 前注9)
- 26) 前注1)、a)、140
- 27) 元禄八亥頃分限帳、徳川林政史研究所所蔵
- 28) 尾州御小納戸日記、(1763)、徳川林政史研究所所蔵
- 29) 御薬園地割御絵図、222×130cm、徳川林政史研究所所蔵、岩下哲典氏の調査に拠る
- 30) 前注1)、a)、139
- 31) 天明以前名古屋図、(1747～1753)、名古屋市鶴舞中央図書館所蔵
- 32) 藩土名寄、8、徳川林政史研究所所蔵
- 33) 茅庵御門外御薬園曲輪之図、1舗、75.5×59.8cm、名古屋市蓬左文庫所蔵
- 34) 前注16)
- 35) 朝日重章、鸚鵡籠中記、(26)、徳川林政史研究所所蔵、; 名古屋叢書続編、(12)、499、(1969)
- 36) 前注16)、97
- 37) 名古屋叢書三編2、尾藩世記、上、352、(1987)
- 38) 青木忠夫、歴史の理論と教育、(88)、2、(1993) ; 青木忠夫・原 昭午、東邦学誌、23 (1)、141、(1994)

Tab. 1 「御薬園之図」所載薬種の植物の比定

薬種名	推定植物名	備考
花壇 a 1 1 イノシリ草 2 釣鐘人參 3 薬師草 4 薏苡仁 5 羌活 6 牛膝 7 扁蓄 8 半夏 9 小茄子 10 ナモミ 11 白鷄頭	ヤブタバコ <i>Carpesium abrotanoides</i> L. ツリガネニンジン <i>Adenophora tripyllum</i> A.DC.var. <i>japonica</i> Hara の図は葉が4枚輪生しているので <i>A.tetraphylla</i> Fisch.か ヤクシソウ ハトムギ <i>Coix lachryma-jobi</i> L.var. <i>ma-yuen</i> Stapf. ウド <i>Aralia cordata</i> Thunb. ヒナタイノコズチ <i>Achyranthes fauriei</i> Lev.et Van. ミチヤナギ <i>Polygonum aviculare</i> L. カラスビシャク <i>Pinellia ternata</i> Breitenb. イヌホオズキ <i>Solanum nigrum</i> L. オナモミ <i>Xanthium strumarium</i> L. ケイトウ <i>Celasia cristata</i> L.	寛永14朝鮮に求む 麻・享 麻・享 麻 麻
花壇 a 2 12 荊芥 13 薩摩防風 14 三七 15 白斂 16 木香 17 商陸	ケイガイアリタソウ <i>Schizonepeta tenuifolia</i> Brig. ハマボウフウ <i>Glehnia littoralis</i> F.S.et Miquel サンシチソウ <i>Gynura japonica</i> Juel カガミグサ <i>Ampelopsis japonica</i> Makino オオグルマ <i>Inula belenium</i> L. ヤマゴボウ <i>Phytolacca esculenta</i> Van Houtt.	麻 麻・享 慶長16渡来・麻 麻・享 享保18・宝暦期渡来 寛永14朝鮮に求む
花壇 a 3 18 コエンドロ 19 升麻 20 知母 21 地黄 22 大黃 23 イノンド	(胡荽) <i>Coriandrum sativum</i> L. <i>Astilbe</i> sp., <i>Cimisifuga dahurica</i> Maxim. ハナスゲ <i>Anemarrhena asphodeloides</i> Maxim. アカヤジオウ <i>Rehmannia glutinosa</i> Lrosch. <i>Rheum palmatum</i> L. (蒔蘿) <i>Anethum graueolens</i> L.	麻 寛永14朝鮮に求む・麻 麻・享 延喜式 延喜式・麻 麻
花壇 a 4 24 瞿麦 25 香柏子 26 白朮 27 竜腦薄荷 28 冬葵子 29 鬱金	<i>Dianthus</i> sp. (杭白止) <i>Angelica dahurica</i> Benth. オオバナオケラ <i>Atractylodes ovata</i> DC. ハッカ <i>Mentha arvensis</i> L.var. <i>piperascens</i> Malinv. イチビ <i>Abutilon theophrasti</i> Medic. ウコン <i>Curcuma longa</i> L.or <i>C.aromatica</i> Salisb.	麻・享 麻 麻・享
花壇 a 5 30 茴香子 31 和川芎 32 馬鞭草 33 胡黄連 34 続随子 35 天門冬 36 澤蘭	ウイキョウ <i>Foeniculum vulgare</i> Mill. (川芎は江戸期に中国から渡来し栽培化したものである) クマツヅラ <i>Verbena officinalis</i> Makino <i>Picrorrhiza kurrooa</i> Royle ex.Benth. ホルトソウ <i>Euphorbia lathyris</i> L. クサスギカヅラ <i>Asparagus lucidus</i> Lindley シロネ <i>Lycopus lucidus</i> Turcz.	麻 寛永14朝鮮に求む 麻 麻 麻

37 百合草 38 紫苑 39 香附子	Lilium brownii F.E.Brown var.colchesteri Wils シオン Aster tataricus L.f ハマスゲ Cyperus rotundus L.	麻
花壇 a 6 40 人參 41 ハツクリ 42 薄荷 43 タカトウ草 44 良薑 45 フナバラ 46 細辛 47 附子	(図2種ともPanax sp.でない) サイハイラン? オランダハッカ Mentha spicata L. アキカラマツ Thalictrum thunbergii DC. Alpinia officinarum Hance (白薇)フナバラソウ Cynanchum atratum Bunge (図は茎があってAsiasarum sp.ではない) (Aconitum sp.)	享保4日光栽培・享保11渡来 麻・文政年間栽培 寛永14朝鮮に求む
花壇 a 7 48 河原柴胡 49 益母草 50 唐川芎	カワラサイコ Potentilla chinensis Ser. ヤクモソウ Leonurus sibiricus L. センキュウ Cnidium officinale Makino	麻 麻
花壇 a 8 51 カキトラシ 52 威霊仙 53 リンダウ 54 五味子 55 青木香 56 スミレ 57 藜蘆	カキドウシ Glechoma hederacea L. var. grandis Kudo ? リンドウ Gentiana scabra Bunge var. Bunge. チョウセンゴミシ Schizandra chinensis Baill. ウマノスズクサ Aristolochia debilis Sieb. et Zucc. スミレ Viola sp. シュロソウ Veratrum maackii Regel var.reymondianum Hara	麻・享
花壇 a 9 58 菊花	キク Chrysanthemum sp.	麻
花壇 b 1 59 杉 60 麦門冬 61 桔梗 62 牽牛子 63 紫蘇 64 芥子 65 粟 66 大豆 67 瓜 68 稗 69 黒菘豆	スギ Cryptomeria japonica D. Don ジャノヒゲ Ophiopogon japonicus Ker-Gawler キキョウ Platycodon grandiflorum A. DC. アサガオ Pharbitis Nil Choisy チリメンジソ Perilla frutescens Britton v.crispa Decne. シロガラシ Brassica hirta Moench アワ Setaria italica Beauv. var. italica ダイズ Glycine max Merrill ウリ Cucumis melo L. var.makuwa Makino ? ヒエ Echinochloa utilis Ohwi et Yabuno ?	麻 麻 麻
花壇 b 2 70 白菘豆 71 木綿	フジマメ Dolichos lablab L. ワタ Gossypium nanking Meyen	
花壇 b 3 72 小豆	アヅキ Phaseolus angularis W.F.Wight	

73 唐黍 74 蕎麦	トウモロコシ <i>Zea mays</i> L. ソバ <i>Fagopyrum esculentum</i> Moench	
花壇 b ₄ 75 蓖麻子 76 胡麻	トウゴマ <i>Ricinus communis</i> L. ゴマ <i>Sesamum indicum</i> L.	和名抄
花壇 c ₁ 77 香薷 78 芋 79 茅根 80 ニラ 81 山梔子	ナギナタコウジュ <i>Elsholtzia ciliata</i> H. サトイモ <i>Colocasia antiquorum</i> Schott v. <i>esculentum</i> Engl. 万葉時代 チガヤ <i>Imperata cylindrica</i> D. Beauv. v. <i>koenigii</i> Durand et Sching ニラ <i>Allium tuberosum</i> Rottler クチナシ <i>Gardenia jasminoides</i> Ellis	麻 麻
花壇 c ₂ 82 小角豆 83 大根 84 茄子	ササゲ <i>Vigna unguiculata</i> Walp. ダイコン <i>Raphanus sativus</i> L. v. <i>raphanistroides</i> Makino ナス <i>Solanum melongena</i> L.	
花壇 c ₃ 85 桑之木 86 菜 87 夕顔	クワ <i>Morus bombycis</i> Koidz. アブラナ <i>Brassica repa</i> L. v. <i>nippo-oleifera</i> Kitam. ユウガオ <i>Lagenaria siceraria</i> Standley var. <i>hispida</i> Hara	
花壇 d ₁ 88 カニクサ 89 エモギ 90 茶ノ木 91 木瓜 92 ケタテ 93 枸杞 94 苦参 95 マンジュサゲ 96 白及 97 ブドウ	カニクサ <i>Lygodium japonicum</i> Sw. ヨモギ <i>Artemisia princeps</i> Pamp. チャ <i>Thea sinensis</i> L. カラボケ <i>Chsenameles lagenaria</i> Koidz. オオケタテ <i>Persicaria pilosa</i> Kitagawa クコ <i>Lycium chinense</i> Mill. クララ <i>Sophora angustifolia</i> Sieb. et Zucc. ヒガンバナ <i>Lycoris radiata</i> Herrbert シラン <i>Bletilla striata</i> Reichenbachfil ブドウ <i>Vitis vinifera</i> L.	麻 麻 麻
花壇 d ₂ 98 石見川 99 木通 100 仙人草 101 忍冬 102 ムクゲ	イシミカワ <i>Persicaria perfoliata</i> H. Gross アケビ <i>Akebia quinata</i> Decne. センニンソウ <i>Clematis paniculata</i> Thunb. スイカズラ <i>Lonicera japonica</i> Thunb. ムクゲ <i>Hibiscus syriacus</i> L.	麻 麻
花壇 d ₃ 103 常山 104 葛根 105 天瓜 106 五加皮 107 青木	ジョウザンアジサイ? <i>Dichroa febrifuga</i> Lour. クズ <i>Pueraria hirsuta</i> Matsumura キカラスウリ <i>Trichosanthes japonica</i> Regel ウコギ <i>Acanthopanax spinosus</i> Miq. アオキ <i>Aucuba japonica</i> Thunb.	

花壇 e (堀)		
108 蒲黄	ガマかヒメガマ(<i>Typha latifolia</i> L. or <i>T. angustifolia</i> L.) (花壇の状態から種の判断は不能)	
109 澤瀉	サジオモダカ <i>Alisma plantago-aquatica</i> L. var. <i>orientale</i> Samuels.	
110 フモタカ	オモダカ <i>Sagittaria trifolia</i> L. var. <i>trifolia</i> (図の形態はカウトグワイに似ている)	
111 真菰	マコモ <i>Zizania latifolia</i> Turcz.	
112 菖蒲	ショウブ <i>Acorus calamus</i> L. var. <i>asiaticus</i> Pers.	
113 川骨	カワホネ <i>Nuphar japonicum</i> DC.	
114 石菖	セキショウ <i>Acorus gramineus</i> Soland.	
115 三稜	ウキヤガラ <i>Scirpus yagara</i> Ohwi	麻

備考欄の略号 麻：幕府麻布薬園に延宝3(1675)年頃栽培されていた薬種（『日本薬園史の研究』所載）。
 享：享保年間(1716~35)渡来。

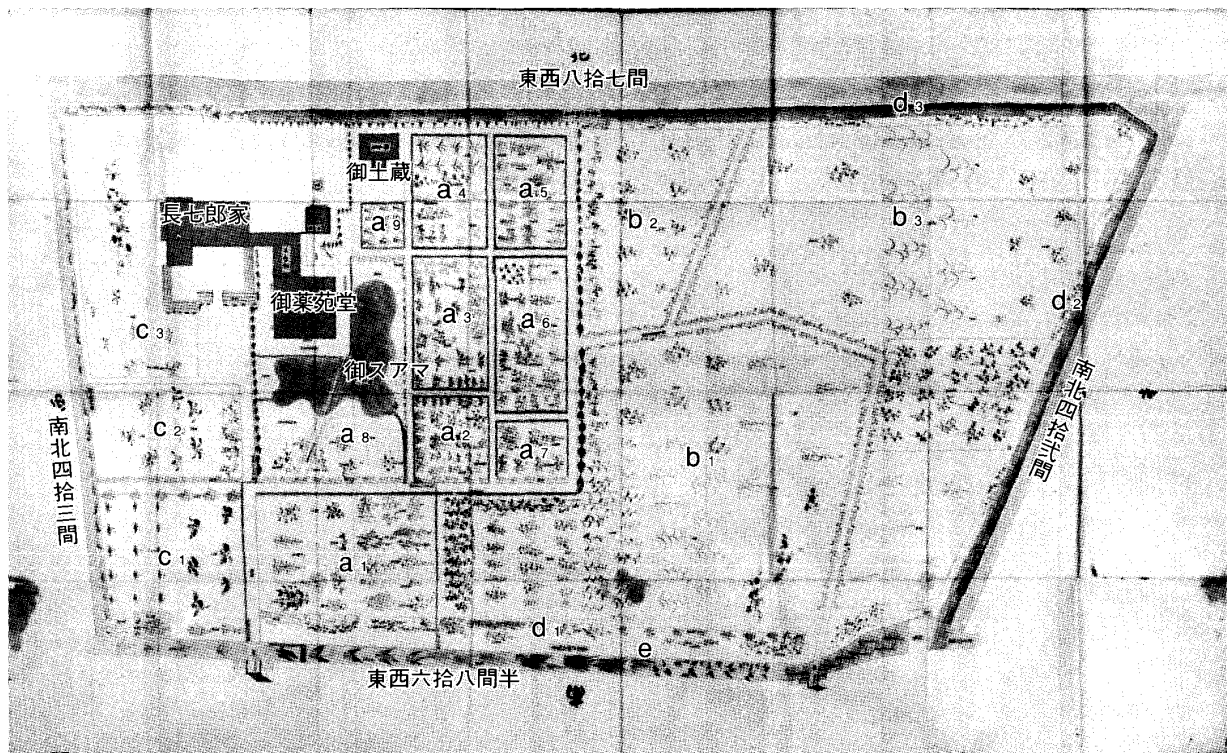


Fig.1 'Illustration of Honorable Herbal Garden (Oyakuen No Zu,御薬園之図)' collection of the Tokugawa Art Museum, Nagoya

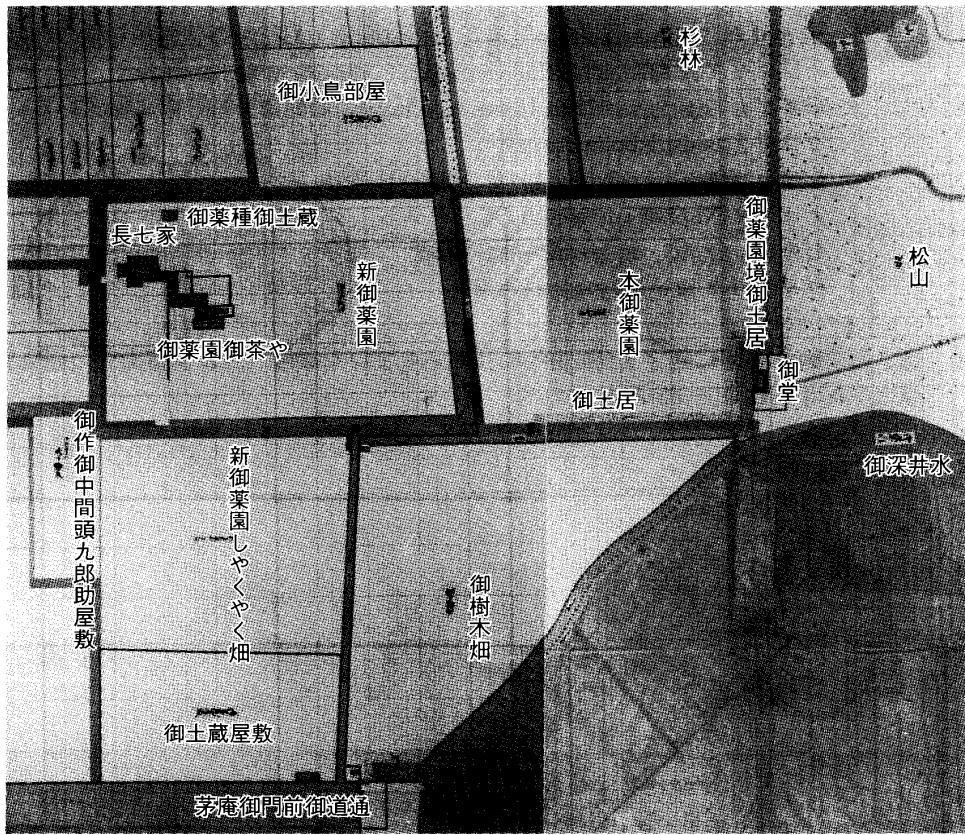


Fig.2 'Illustration of Shitaofuke Garden (下御深井絵図) ,1684' collection of Hōsa Library, City of Nagoya

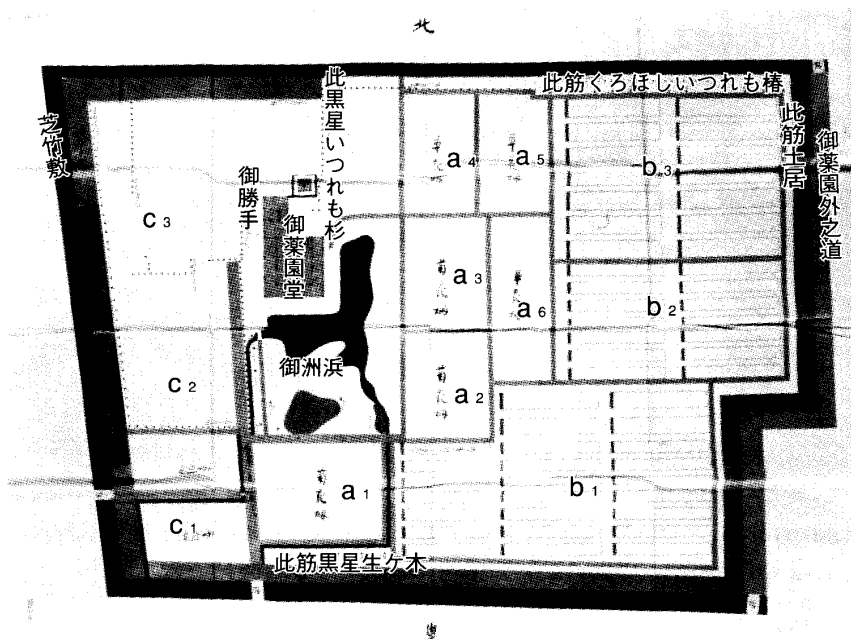


Fig.3 'Illustration of Honorable Flower and Herbal Garden (OhanabataOyakuen No Zu, 御花畑御薬園之図)' collection of Hōsa Library, City of Nagoya

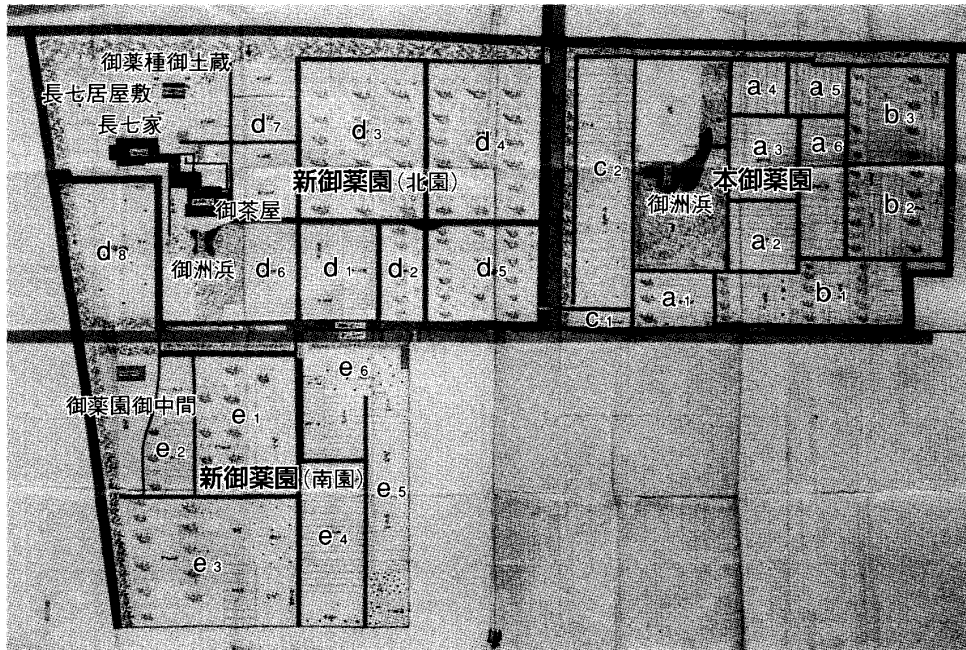


Fig.4 'Honorable Illustration of Herbal Garden (Oyakuen Oezu,御薬園御絵図)' collection of Hōsa Library, City of Nagoya

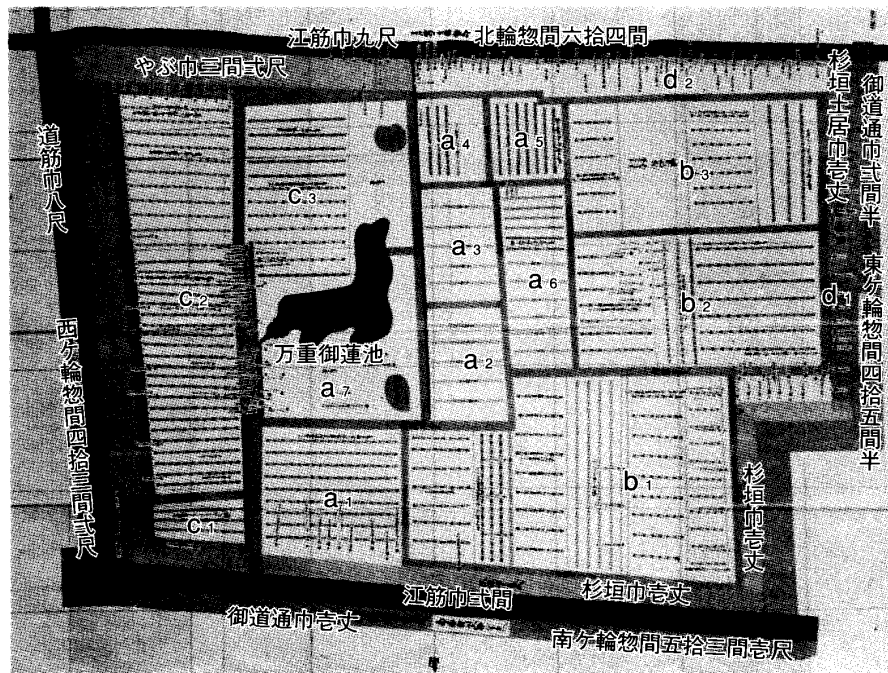


Fig.5 'Honorable Illustration of Original Herbal Garden (Moto Oyakuen Oezu,元御薬園御絵図)' collection of Hōsa Library, City of Nagoya

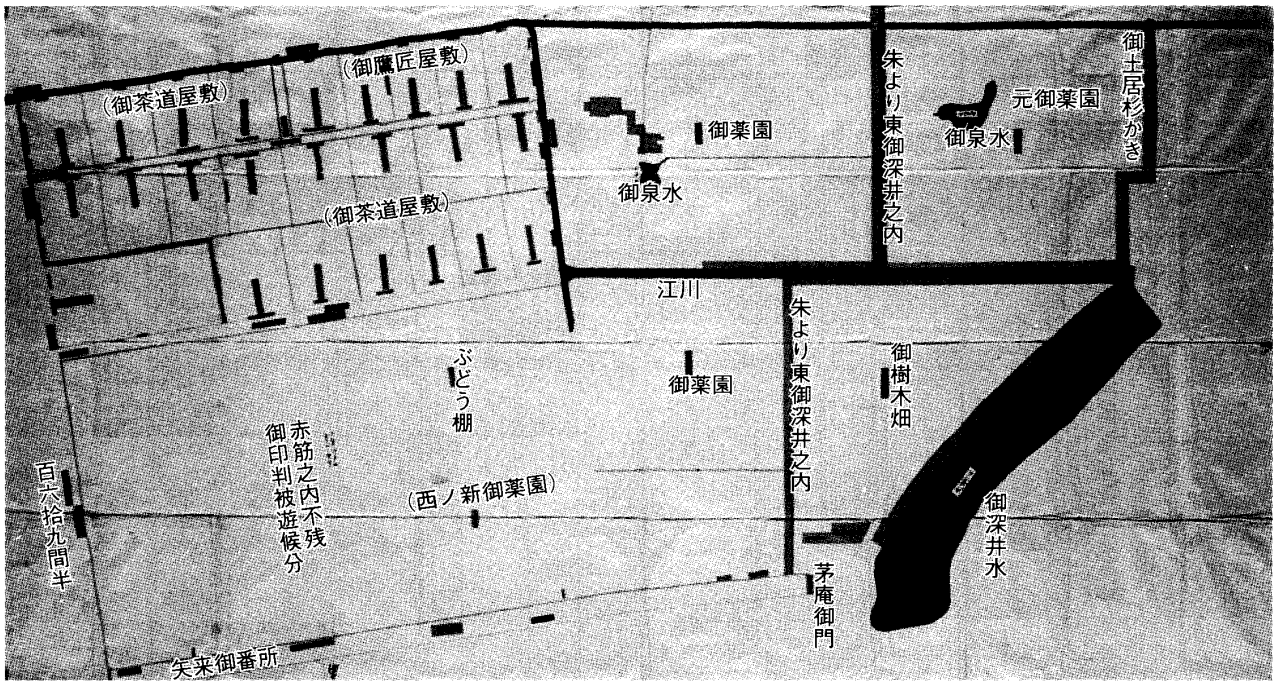


Fig.6 'Illustration of Honorable Herbal Garden, Tree Garden and Stable Field (Oyakuen, Ojyumokubata, Oumayabata Ezu, 御薬園御樹木畑御厩畑絵図)' collection of Hosa Library, City of Nagoya

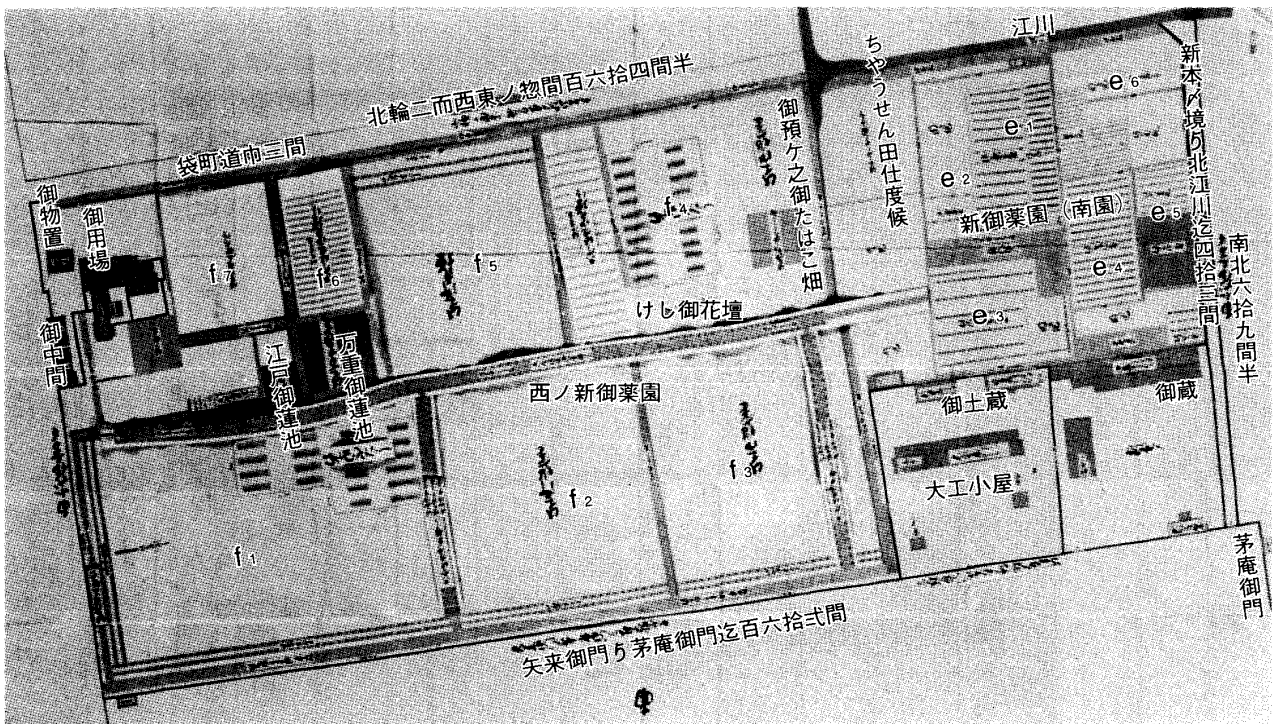


Fig.7 'Illustration of Honorable New Herbal Garden (Shin-Oyakuen Sashizu, 新御薬園指図)' collection of Hōsa Library, City of Nagoya

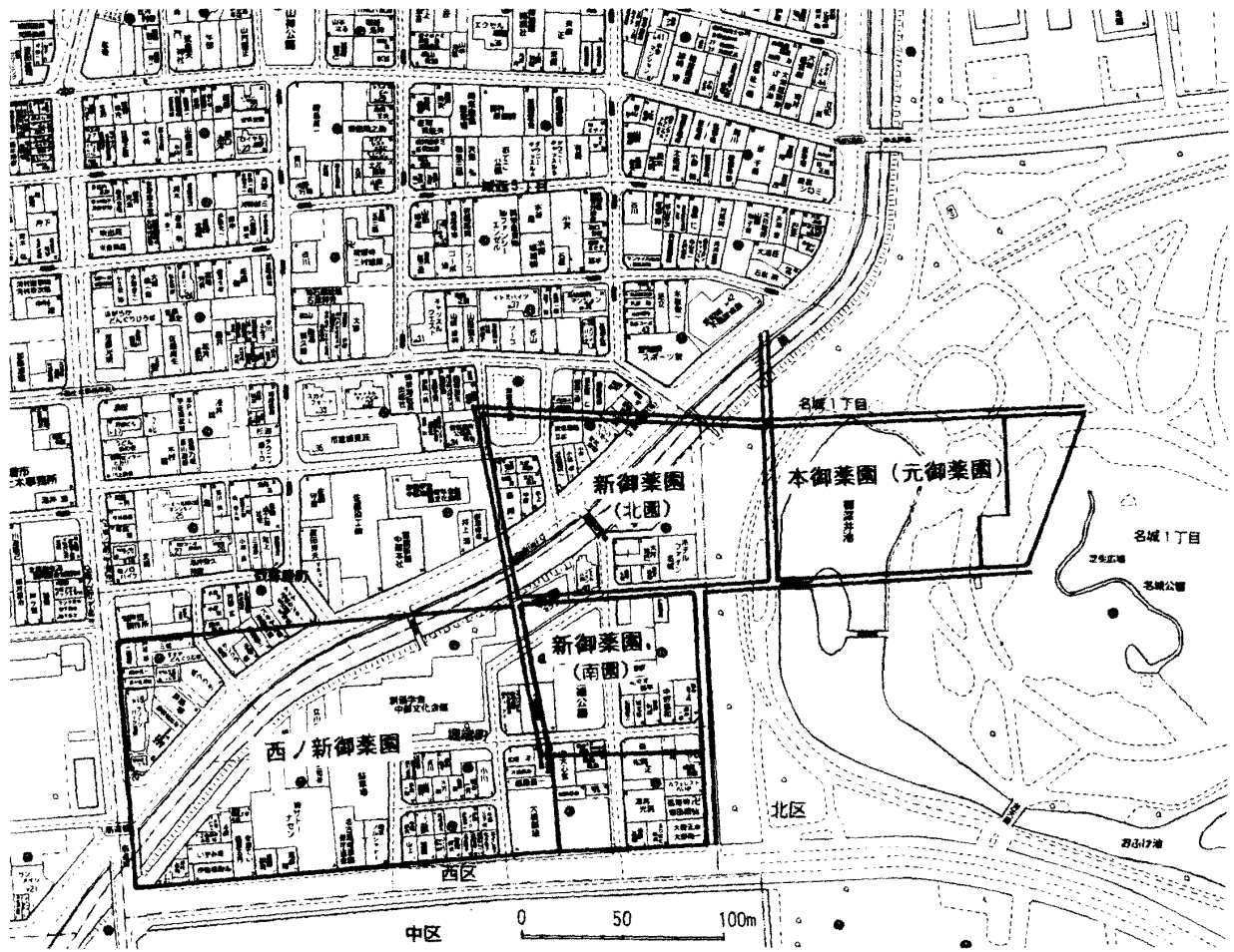


Fig.8 Estimated location of the Ofuke Herbal Garden



Fig.9 View of Estimated location of the Ofuke Herbal Garden. photo. Sept.1995